

Garden City, Melbourne での1年間

神戸松蔭女子学院大学人間科学部心理学科 教授

土肥伊都子 (どひ いつこ)

東日本大震災発生から間もない2011年4月より、後ろ髪を引かれつつ、メルボルン大学の嘉志摩佳久先生のもとで academic visitor としての1年間を過ごしました。メルボルン大学を選んだきっかけの一つは、長期研修先を検討中に読んだ、ジェンダー・ステレオタイプの伝播に関する嘉志摩先生の論文に興味を持ったことでした。

日本社会のジェンダーは、集団主義、日本型福祉、夫婦を社会の最小単位と考える「カップル単位」(結婚強制)社会のしくみなどによって促進されていると常々考えていました。そこで今回の研修は、これまで行ってきたジェンダー研究に、これらの文化的視点を新たに加えた研究モデルを作ることが主な課題となりました。

嘉志摩先生には、通算15回にわたりマンツーマンのご指導を頂きました。日豪の文化比較をはじめとして、カップル単位社会における個人的アイデンティティの個人はカップルを指すと考えてはどうか、カップル単位の日本よりオーストラリアのほうが夫婦同伴で行動するのはどう解釈すべきかなど、お互いの夫婦関係を例に挙げての実感のこもった、苦笑あり感嘆ありの議論は、とても刺激になりました。

オーストラリアは米国と同様かなり個人主義が強く、男女平等度も高いといわれますが、そこで実生活を送ったことは、ジェンダーを考えるうえでも良い経験になりました。たとえば、オーストラリアの国民的スポーツといえ

football (日本ではラグビーに近い)ですが、その選手たちのマッチョさが、男らしさの一部になっているようです。また女性は、胸の谷間(洋服のデザインが、胸のあいているものがとても多い)などを女らしさの重要ポイントと考えているようです。このように、身体的表現についてのジェンダーは強いのですが、その反面、家族内での夫婦役割分担や、夫婦の「あるべき姿」といった標準はあまりなく、法的に結婚しているカップルも半数ほどです。私が1年間に会った夫婦だけでも、専業主夫あり、子連れ再婚あり、国をまたいで通い婚ありと実に多様で、それぞれのカップルが、自分たちにとってベストな人間関係を模索し、作り上げているのだと感じました。

また、会話の中に頻繁に相手の名前を差し挟む習慣や、自分が自分のことを一番に考えているのと同様、相手も自分のことを一番に考えていることをわかまえている点などは、個人主義の表れなのではないかと思いました。

大学では、授業を聴講した他に、20名ほどの教員、大学院生が集まる社会心理学の研究会にも参加しました。これは、持ち回りで1本の雑誌論文の内容を発表要約し、議論を交わすものでした。発表担当者は赤白のワイン1本ずつと、チーズ丸ごと2個とクラッカーが盛られた大皿を用意し、議論の間中その大皿を皆が回すというカジュアルな研究会でした。日本では研究会の後に二次会があ



Profile — 土肥伊都子

1990年、関西学院大学社会学研究科博士課程後期課程単位取得退学。1997年、博士(社会学)取得。専門は社会心理学。主な著書は『ジェンダーに関する自己概念の研究』(単著、多賀出版)、『ジェンダーの心理学』(共著、ミネルヴァ書房)、『女と男のシャドウ・ワーク』(共編著、ナカニシヤ出版)など。

り、そこで初めてアルコールが飲めるのですが、こちらは最初からアルコールを飲んでいるので、いわば一次会と二次会がドッキングした一手間省けた形式でした。

メルボルン大学の心理学科には、60名以上の教員が在籍していましたが、数人の先生方のご縁もできました。まず、大学の書籍部で目にした *Assessing Mental Health Across Cultures* という単行本の著者のお一人、ストーク (Stolk) 先生、組織心理学者で職場での交渉がご専門のオレカルンス (Olekalns) 先生、自閉症研究者のプライアー (Prior) 先生などです。

「長期」研修とはいえ、1年はあっという間でしたが、この貴重な経験が、今後の研究や教育のカンフル剤になればと願っています。



Melbourne 郊外, Kew の「哲学の道」